

浄土

1984-4

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回（一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別裁承認雜誌）第三二五号
昭和五十九年三月二十五日印刷 昭和五十九年四月一日発行
第五十卷 四月号



甲子

林

治

慈悲の光抱く子を映す甘茶仏

うららかな春の一日。境内は燦々と照り映える陽光に、み仏の光明に包まれるがごとく、とても暖かい。ことに厳しかった冬の寒さを経験してきた私たちには、この日差しがなによりもありがたい。

参詣の同行も、思わずほはえんで、二人三人、四人五人となごやかである。今日は、はるか二千五百年の昔、遠くインドの聖地で、大聖釈尊仏陀のお生まれになった降誕会。向拝の前にしつらえられた花御堂の清楚な荘厳が可愛らしく、子供たちならずともこの花祭に魅きつけられる。誕生仏はいともあどけないが、「天上天下唯我独尊」と大きく声を出だされた、かのゴータマ太子を想い起こさせて改めて敬慕の念を強くする。小さな竹柄杓を取って、甘露の甘茶をかける子供たちの明かい声が楽しい。その輪の中に入って行くこのひと時が大切であると思

う。

ちょうど一年半の子供を抱いて、私も小さな誕生仏の頭上から甘茶をかける。灌仏は、右手を天上に向けて高く、そして左手を大地に向けてしっかりと指差している。わが子を抱き揺すりながら、共に拝する甘茶仏に、ふと愛児の笑い声が映っているような気がした。慈悲の光によって、私たち二人は背中から大きく包み込まれるような感覚でもあった。

み仏のご加護を受けて、私の子が誕生仏のように清らかに、可愛らしく、そして元気で育って行っている。ここに参詣する人たちと同じように、みんな明かるく、楽しく、仲良く暮らして行きたい。

子どもらも頭に浴びる甘茶かな 小林一茶

花祭は子供たちの楽しいお祭りである。しかし子供にとっては、大人たちと一緒に参加できることがもっと楽しいことであらう。

(勝崎裕彦)

四月号



無量寿仏の威神光明は、最尊第一にして、諸仏の光明もよく及ばざるところなり。

——『無量寿経』光明歎徳章

目次

特別寄稿

浄宗護国篇について……………藤井亮彦……(2)

法話

仏生会に寄せて……………大成善雄……(7)

お花まつりに寄せて……………金子寛哉……(12)

《世相評談》

天窓を開こう……………宝田正道……(24)

…念仏信仰の増進…

名号書写運動を起こそう……………吉田光覚……(30)

心のはなし(下)

父の手のぬくもり……………梶原重道……(19)

論語「仁」論(上)

——「仁」は共同社会の理念——……………河野喜雄……(40)

◎現代詩コーナー 彼方からのいのち……………坂田文三……(36)

浄土句集……………田牛畝選……(38)

<表紙裏>一月一句「慈悲の光抱く子を映す甘茶仏」

表紙 小林治郎画

カット 大正大学美術部

☆☆

(特)
(別)
(寄)
(稿)

浄宗護国篇について



藤^{ふじ}井^い亮^{りょう}彦^{げん}

(古河市正定寺住職)

(一) 参州大樹寺登誉大和尚伝

信蓮社登誉と号す。相州小田原の人幼年に

して出家す。性豪壮容貌魁偉にして多力を以て聞こえ六十人の力があつた。初め洛陽一心院に住し後うつりて参州大樹寺の主となる。永禄三年東照神君、兵を出して利あらず。

身を脱して大樹寺に入る。時に随う者僅に十八人、神君登着上人に曰く。今日事急なりどうすべきかと。上人曰く身命を捨てて護らん。敵恐るるに足らず、白布を以て旗となり、厭離穢土欣求浄土と大書し旗を掲げ上人自ら兵を指揮す。神君これを見て勇壮なりと言う。大いに感悟して信心を決定し十念を拝受す。敵兵の至るを待つ時、一僧有り。祖同という。勇悍にして多力八十人力あり。祖同甲冑を着し刀を持ち神君の馬を御す。敵兵方に至って已に寺門にせまる。神君刀を抜きて門関を切る戸を開いて進むこと先登なり。従者十八人亦随って突出す。雄壮威猛なり。敵兵潰滅す。神君勝を得たり。時に神兵寺刹を衛護するを見た者有りと言う。此れ神君信心專到の感づる所なり。翌日凱旋して岡崎城に入る。神君兵を用ゆるときは此の旗を掲げ、戦えば必ず勝ち未だ且て旗を離さず。その切る所の門関は今に至るも尚大樹寺に在り。刀痕宛然として残る。或年大納言義直公往きて一度此れを

見て曰く、先君之遺意なりとし、箱を製して収め寺珍とした。

甲陽に武田信玄と言う者あり。一方の名将なり。信玄常に歎じて曰く、家康は性質方正にて徳を以て人を感化する。これ真の勇士なりと、又登着上人は布を以て軍衣を製し、その背に弥陀の号を大書し念誦加持して此れを神君に授けて曰く、戦場に赴かば甲冑は不用なり、大聖の加護によるといへども、その人純信の致す所なりと、神君大に喜びて頂戴した。

(二) 武州増上寺中興観智国師伝

天正十二年観智国師増上寺に住す。開山西着上人より十二世なり。神君は観智国師を師として曰く。我参州に在て師の徳風を聞くこと久し。欣然として師の道念有りてその言の謙遜なるを喜び、十念を拝受し師檀の約束

をした。神君大いに資材を喜捨して増上寺を修復した。故に大梵刹となり周囲五里余、殿堂三門宝塔房室棟宇宏壮にして東方寺刹の冠となる。大銅鐘を鋳る。その声洪大にして遠く百里に聞こゆ。一切経を置き支那高麗の善本を以て宝とした。神君護法の志を尽す。淨土の宗教一時に勃興して念仏の声天下に洋洋たるは此れ師の力にして而も神君護教の功多し。

神君慶長年中大軍をひきいて敵場に赴く折、師より十念を受く。師曰く公の姓は松平なり松は千歳を越えても枯死せず、松の字は即ち十八公なり、而して阿弥陀仏六八本願の第十八を以て願王と称す。それ人臣大功有るときは公を授け王に封す。しからば即ち十八願王と十八公と其の言を同じうす。公十八公を姓とす。治国の法を十八願王により良く一称一念の功を捨てざれば名実符合して生仏一体なり。松氏の治は即ちこれ弥陀の益、弥陀の化は即ちこれ松氏の任と言うべし。公寿算

永久にして遂に天下を安靖する良いきざしがある。浄教国家を護持する聖証なり。

神君聴受して深く感歎す。この行利あることを得ば必ず精舎十八区を建て永く英才を育てんと言ふ。師和歌を吟づ。草も木も枯れたる野辺に唯ひとり松のみ残る弥陀の本願と。神君兵を進め大勝を得たり。天下已に定り甲冑を解き兵に休養を与えた。武総野等の数州に浄宗の教鬘を開創すること十八所、今世に言う十八檀林なり。

(三) 増上寺阿弥陀仏靈像記

三縁山増上寺の大殿、特に一座を設けて阿弥陀仏像あり。高さ二尺六寸、これ東照神君かつて奉供する所の尊像なり。世人これと呼んで黒本尊と称すと言ふ。久しく歳月を経て金泥ごとく變じて黒色となる。又或は九郎本尊ともいう。源九郎義経の奉持したる故を以て名づく。思うに黒と九郎との故の伝

称であらう靈像は始め參州桑子の明眼寺にあり神君此の靈像を礼し五十石を以て寺業に充て此の靈像を得たりという。

信州武田勝頼という者一方の勇将なり。しばしば神君と戦う。勝頼は密かに刺客を放ち神君に近づけたが乗づべき機会が無かった。而し常に夜眠を伺っていた。ある夜神君熟眠している時夢にて靈像神君に曰く、何ぞ安眠をなすや速に起きて念仏せよと。その声甚だ急遽であつた。神君驚き即ち仏前に到り念珠を持つて念仏す。刺客此の事を知らず。ひそかに寢室に入り刀を以て神君を切らんとしたが、そこには神君の姿が無く刺客大いに狼狽した。神君は刺客を見つけ声を上げた。衛士これを聞いて馳せ来たり刺客を執らえた。

神君は刺客に対し、意気壮勇なり烈士というべしと即ち此れを放し帰らしめた。勝頼これを聞いて大いに畏怖を生じ刺客も亦家康に恩ありと感じたという。

神君此の厄を免る時、手に二連数珠を持つ

ていた。二連数珠は一心院の称念上人に起ると伝えている。神君靈像通夢の体験を得て、益々帰敬を加えた。

慶長二十年神君摂州難波に軍を出し両氏の安危は此の一戦にかかっていた。しかるに兩軍兵を交えるに當つて一僧が現れ身体皆黒色にて、神君の陣より敵城に向つて飛ぶが如く突進し敵兵に多大の損害を当えた。兩陣これを奇とし、人間の力にあらずと驚いた。

親智国師は弟子了と廓山の二上人を神君の軍中に従わせた。神君は二上人と共に仏龕を開いて見ると、光る花のうてなだけがあつて靈像の姿がなかった。神君曰く、戦場を走つた一僧は即ち此の尊僧の変作する所なるかと。二上人と共に涙を流し感歎した。戦たけなわにして日が暮れ兩陣各退いて後龕中に尊像が還つて来たという。

神君館に帰つた後、廟堂を増上寺に建て安国殿と号した。尊像を奉安し祭奠を大に行つた。二代大將軍秀忠公も共に靈像を都城に

奉供し帰敬すること神君同様であつた。

延宝四年九月二十二日の夜、丈室失火し霊像の所、焰火すでに盛んにして救わんと欲するに方法が無かつた。その時一人身を躍して焰の中に入り霊像を捧げて庭外に移した。衆人大いに喜んで霊像を見るに左足のかかとの処無し、火が消えて探すと灰燼の中に焼けずに残っていた。此れを接ぐと元の通りとなつた。

元禄八年大將軍五代綱吉公は増上寺大殿の修理をした。その時母桂昌院は仏龕を新たにした。宝帳玉扉構飾に精巧にして莊嚴は成就し命じて大殿宝壇の上に遷した。母君と綱吉公同じく礼を作し、近臣諸司等皆霊像を景仰した。利益ありて以て天下を安んじ神君精誠の所感を歴代將軍が良く護つた。国運は法運と共に窮りなきを得て、四海安泰に万民和洽して無事の盛世に生き歳物の繁成を樂しみ、ともに淨利に往き同じく不退に至らん事、それ亦これにある事前事を記して後世に示す。

淨宗護国篇序には、干時正徳二年龍集壬辰仲秋十八日三縁山衆首慈引堂沙門觀敬序となつてゐる。卷末には宝永七年七月朔日、上州高崎大信寺、住持沙門貞養良信謹録、及撰州生玉法泉寺、住持沙門実誉珂然校閲とあり、淨宗護国篇大尾となつてゐる。尚京極通門福寺前町 書林 秋田屋清兵衛 寿梓 とある事を茲に記す。

読者の皆様のご紹介を!!

小冊子『浄土』は、第五十巻目に入り、遅々とした月刊誌としての活動をしています。どうか愛読者として一人でも多くの人々に広めて行つて下さい。

どうぞ浄土念仏のささやかな信仰生活に、本誌の持つてゐる良いものをのおくみとりいただいて、皆様の日々の生活の一助として下さい。

法然上人讃仰会

(法)

(話)

仏生会に寄せて



大おお成なり善ぜん雄ゆう

(岩国市称光寺住職)

今から二千五百年も昔、早くも古代文明の花の咲きほこったインドの北部ネパールの地に於て、人類最初の「苦滅の法」をお悟りになられた釈尊の偉大な成果は、その後の文化の発達に伴って、人々の迷いもまた発展していつて、それを悟りに導くための教えの様相もまた、複雑になり、今では仏教は極めて難解な、人々を迷惑させるものになっている。

しかし釈尊がお悟りになられた精神内容の原点

は、それ程複雑なものではなかったように思われる。

釈尊は「我れはただ苦の滅を説くだけである」とおっしゃって、当時の思想家達、たとえば六師外道の人達が、いろいろな議論の花を咲かせているのに対して、「不戯論」或いは「毒矢の喩え」をもって自己の立場をはっきり示しておられる。

釈尊が道を求めて王城から出家されたのは、老病死等の苦を解決する道を求めてであるが、この

四苦の他に、当時の弱小国家が大国に滅ぼされる、という一族滅亡への危惧もあったであろうし、また当時の階級制度への批判もあったことであろう。釈尊がお悟りになられた後、カピラ城に帰られて一族の子弟七名の出家に先立って、突如彼等の奴隸であったウバリを先に出家させて、彼等の先輩の位置におかれたこと等に、釈尊の階級打破への意欲のなみなみならぬものを感じるのである。

さて釈尊のお悟りの内容は、四諦、三法印等からうかがうことが出来るが、私は中でも四諦の苦集滅退の中の第二の集諦がお悟りの中心であったのではないかと思う。

集とは「苦の原因」ということであるが、苦がどうして起るのか、という苦の原因を見極められたのが、釈尊のお悟りの核心であったのではないだろうか。

仏教の旗じるしの三法印の最初の「諸行無常」の行は「存在」という意味であるが、これは五蘊（ごうん）すなわち色・受・想・行・識の五つの存

在中の第四番目であって、行とは、我々の意識の見分ける力、いいかえれば「分けて見る働き」の識は、実は仏教、特に世親の唯識説では「迷いの三界は、意識の虚妄なる分別によって起る」として、意識やその奥のマナ識は迷っている心のことである。諸行無常の行というのはこの意識の働きによって成り立っているもの——あることになっているもの——のことであって、我々が虚妄分別と勝手に分けて別々の存在とと思っている物は、実は無常なのだ、ということであって、釈尊が五蘊の中からこの行だけをとり上げられた意図を察しなければならない。

三法印の第二の諸法無我の法というのも存在という意味であるけど、この方は真実の存在のことであって、釈尊は「法に帰依せよ」とまでいわれた、私共の帰依し、頼りにするに足る存在のことである。

法にはいろいろな意味があって誤解を生じやすいのであるが、一応その意味を並べてみると第一

に真理・法則という意味。第二に仏法という場合は釈尊の教えのことであり、その他人間関係の上での法律や道徳、習慣なども法といって「そんな法があるか」等ということもある。しかし釈尊が「法に帰依せよ」といわれたのは、無我なる法であって、我とは他のものと区別して独立の存在と思っているものことで、三法印の諸行無常の行の中にはいるべきである。

釈尊当時の正統バラモンの教えでは、この我、すなわちアートマンは、この私の身体の中に宿っていて、この私に呼吸させているもの、アートマンとは呼吸という意味であって、いきているのはこの我がまだ私の身体の中に宿っているからである。アートマンがこの私の身体に愛想をつかして出て行くのが死ぬことである。いわば我とは私の魂であるから、魂は次の何かに生れ代って行くから不滅であるという、輪廻思想に支えられた考え方で、その修行のヨーガとは全世界を動かしている梵（ブラフマン）とこの私の中のアートマンとを一致させるための梵我一如の行法がヨーガであった。

て、その行の中には、禁欲、苦行が課せられていた。釈尊も約六年間、必死になさったのである。この苦行の考え方の中に、肉体の欲望は悪魔であるから、精神の力でこれにうち勝たなければならない、という精神と肉体を二つに分けて見る見方がある。

釈尊のお悟りは無我、すなわち別々に分かれた存在はない、ということ悟られたのであるから、我を梵に一致させよう、というバラモン教のウパニシャッド哲学の精神を更に一歩進めて、全てがただ一つであり無限の存在であるところの法（ダルマ）に帰依せよ、教えられたのである。

この法はまた、あらゆる仏の本地は法身であるともいわれる。仏とは覚った人、分った、気がついた人という意味であるけど、何か分ったのか、といえば、この私は絶対無限の仏のお身体の中にある、ということが分った人が、仏なのである。人類で最初にお悟りになられたのは釈尊であるけど、そのご指導によって、その後悟られた方々も皆仏なのである。日本では殺人事件での死体のこ

とを仏というけど、必ずしも死ななくても、私を生かしておられる大自然、法界の命の中の私なのだ、と既にお悟りになられた仏様方のお心の中では一切の人類、いや動物までも私の身内である、とのお慈悲のいつくしみの心をもっておられるのである。その心を受けとることが出来たら、その人は救われたのであり、絶対価値を頂いた仏なのである。この様に気がつくということは、生きた心の働きであって、あえて死体になって、心の働きがぶくなくなることだけが仏なのではない。

死んでしまえば煩惱の主体たる我見、自我主張が起こらなくなるから、悟られた方と同じ様に苦を感じなくなるので、一面の真理は含まれている。しかし積尊はバラモン教の「苦行をなし遂げて死んだら、肉体の悪魔に対する精神の勝利である」という苦行主義の教えは、決然と放棄しておられる点を見逃してはならない。

積尊は多くの弟子達の悟りを認められたから、「一つの道を二人で行くな」と伝道の旅に上らせられたのであろう。

話を元へもどして、四諦の集起とは苦の原因ということであるが、それは我見であり、我執である、と積尊は説かれた。

いわば自我の主張である。ほんとうは無我であって自我はないのであるが、生活するうちに利己主義的な考え方になってしまうのである。そのままで通れば苦はない訳であるけど、次第に考えが偏ってしまつて、その思いの通りには現実が動かない事態が起つた場合が苦なのである。

苦は個人の苦悩に止まらず人間関係の上にも問題を起しやすい。

苦とは氣にいらん、ということであり、思う様にならん、ということである。夫婦の間でも、親子の間でも、いや自分自身でも思うに任せないことはあるもので、この点現代人にも仏教は必要である。「公教育では宗教は教えません」という日本の現状はあまりにも重大な欠陥教育である。

宗教家たる者は公教育から排除される原因になった宗派の対立の解消に最大限の努力をして、公

教育にも取り入れられる様な、真に公明正大な教えを一日も早く樹立して、公教育での宗教教育の実現に努力しなくてはならないのではないだろうか。

それが釈尊の信心にも添うことになるのではないだろうか。

戦争の放棄ということは今や人類にとって最も重要な課題となって来た。カピラ城の滅亡を惧れた釈尊によって発見された苦滅の道はまた、平和への道でもある。

釈尊の教えは二千五百年たつて、ほんとうに役に立つ時が来たのである。

殺す勿れ、殺人は自我の主張の最たるものである。全てに南無するところに平和が訪れ、楽園が生れ、任せきった人からは一切の苦悩は消滅する。

アショカ王が、ベンガル湾岸のカリンガを遠征して十四万人もの捕虜を得たにもかかわらず、味方の四万人の死傷者をまのあたりに見て、仏教僧の「殺す勿れ」の言葉に心うたれて遂に勝者でありながら、「戦争放棄」を決意し「法による統治」

によって、現在インドの国章にもなっているアショカ王の石柱を数十カ所の仏跡に建て、遠くエジプト、シリアまでも伝道師を派遣した結果、民族利己主義のユダヤ教の中から「汝の敵を愛せよ」という、イエス・キリストをも生み出させた功績を偲びたい。幸いにして世界随一の戦争放棄の憲法をもち、世界一の仏教国である日本の私達こそが、人類を戦争による絶滅から救い得る唯一の国民なのだという自覚と使命感をもち得なかつたら、人類、いや全宇宙に唯一の存在である全ての生物も遂に救われることなく一切の文化とともに、滅亡し果てることになるであらう。

仏教徒の奮起を心から熱望してやまない。

霧 林 道 義 著

詩集 『平地林』

変型A5版 七〇ページ 定価一五〇〇円(千二百五〇円)

人生道場出版部刊

——お問い合わせは、(〇三) 二六二—五九四四

法然上人鑽仰会事務所まで——

(法)

(話)

お花まつりに寄せて



桜の花が満開になる頃、小学校の入学式にいそいそと出かけて行く、少し緊張したあどけない新入生の顔を見ると、あの子もこの子

かね
金子
かん
寛
さい
哉

(大正大学講師)

も、皆んなお花まつりの時、花御堂でかわい
い手を合せて誕生仏に甘茶をかけた子供達だ
ったなと想い出す。

他の行事との支障のない限り、拙寺ではここ二十年来、地域の仏教婦人会を中心に、年中行事の一つとしてお花まつりを行なってきた。今から七年程前地域の浄土宗青年会と合同で、拙寺を会場に近所の子供達も混えてかなりにぎやかに行なうことが出来た。子供達がこの行事に多数参加するようになったのはそれ以後のことである。それ迄この行事は婦人会々員相互の親睦会の性格が強かったように思う。それはとも角、お花まつりの行事はその性格から言っても、やはり子供を中心に行ないたいと言うのが私の素朴な念願であった。今年も又役員さんはじめ、会員皆さんのお骨折りでにぎやかにお花まつりの行事が行なわれる予定である。そして、幼い子供達の心に、又新たな仏様の種子が播かれて行くことを願っている。

お花まつりの行事が釈尊の誕生を祝うもの

であることは今更言う迄もないが、この行事をその本来の意味から考えて「仏生会」「降誕会」とも言い、又釈尊伝の記事に因んで甘茶などを誕生仏にそそぐことから「灌仏会」とも呼ばれ、更に釈尊のお生れになった場所がルンビニ園と言う花園であったことから、その誕生仏を安置するお堂をお花で飾るので「お花まつり」とも言うようになった。この外に、インドや西域或いは中国等では、誕生仏を車に乗せて引きまわし、お祝いをするので「行像」とも呼ばれている。しかし、現在日本の寺院で行なわれているのは「お花まつり」と言う名が一番親しまれているようである。

釈尊の伝記は種々の經典に記されるが、その大綱は多くの場合、(一)從天下、(二)託胎、(三)出胎、(四)出家、(五)降魔、(六)成道、(七)轉法輪、(八)涅槃のいわゆる「八相成道」の形になっている。この中「お花まつり」は(三)の出胎にあたる訳であるが、今この八相の形を最も良

くそなえてゐる『過去現在因果經』によつて、積尊誕生の様子を見ると、およそ次のように記されている。

時に白淨王、心に自ら思惟す、「夫人懷妊し、日月將に満んとす。而も其の生産の相あるを見ず」と。此の念を作す時、たままた夫人の信を遣はして王に白すに遇ふ、「我れ今園林に出でて遊觀せんと欲す」と。時に王、此れを聞きて益々歡喜を懷き、即ち外に勅して藍毘尼園を淨くし掃灑せしめ、更に諸の妙花果を栽植せしむ。流泉浴池を悉く清潔ならしめ……中略……

是に於て、夫人即ち宝輿に昇り、諸の官屬并に及び姪女の輿に前後に導從せられ、藍毘尼園に往く。爾の時、復天竜八部ありて、亦皆隨從して虚空に充滿す。爾の時夫人既に園に入り已るに、諸根寂靜に十月満足し、二月八日、日の初めて出る時に於て

夫人彼の園中に一大樹の名けて無憂と曰ふあるを見る。花色香鮮に、枝葉分布して極めて茂盛を爲す。即ち右手を挙げて之を牽きて摘まんと欲するや、菩薩、漸々に右脇より出づ。時々樹下に亦七宝の七茎の蓮花を生ず。大きな車輪の如し。菩薩すなわち蓮花の上に墮し、扶持する者なくして自ら行くこと七歩し、其の右手を挙げて師子吼す。「我れ一切の夫人の中に於て最尊最勝なり。無量の生死今に於て尽く。此の生に一切の人天を利益せん」。

是の言を説き已れる時、四天王は即ち天の繒を以て太子の身を接して宝机の上に置き、釈提桓因は手に宝蓋を執り、大梵天王も又白朮を持ちて左右に侍立し、難陀竜王、優婆難陀竜王、虚空中に於て清淨の水の、一は温、一は涼なるを吐きて太子の身に灌ぐ……

この文中の「白浄王」とは釈尊の父「浄飯王」のことであり、「夫人」とは母「摩耶夫人」のことである。

浄飯王はインドの迦比羅国の城主であり、母はその隣にある拘利国の城主阿菟王の姫であって、浄飯王のもとへ嫁いで来られたのである。記録によると両者の間には結婚後二十数年来子供が無く、釈尊は摩耶夫人四十五歳の時始めて妊はらまれた子であったと言う。そのような中で誕生だけに、両親のみならず迦比羅国あげての喜びであったことと思われる。しかし、その喜びもつかの間、生母摩耶夫人は王子誕生後一週間にして亡くなられたのである。

摩耶夫人亡きあとには夫人の妹にあたる波闍波提に養育されて成人することになるのであるが、浄飯王と養母との間には後に難陀と盧波という二人の異母弟があったと伝えられている。このような家庭環境は後に出家、修行、成道へと展開されて行く、釈尊の求道生

活の上で大きな要因になっているように思われてならない。

それはさておき、今この経に記される釈尊誕生の記事は、現実の人間釈尊と、悟りを開かれた仏陀釈尊とが二重写しになっているように想われてならない。それはこの経が記されるに到る迄の長い間の仏陀釈尊に対する帰依敬仰の念と、釈尊によって説かれた教説が広く流布され、その教えを信奉する人々によって、釈尊の偉大な人格が語り伝えられるようになって来た為ではないかと思う。現在我々の知っている釈尊像も、そのような意識の延長線上にあると言っても過言ではない。

ただこの経説を見て少し気になる点が一、二ある。それは釈尊誕生の日を二月八日とする点と、誕生後に七歩あゆんで述べた言葉が「我れ一切の天人の中に於て、最尊最勝なり」とする点である。今日一般に知られているのは四月八日の誕生であり、又「天上天下、唯我独尊」と言う言葉である。

誕生日の異なりは恐らく印度と中国や日本の暦の違いによるものであって、それ程問題にはならない。ただ誕生後に言われた言葉について調べて見ると、古い經典や記録ではどちらかと言うと今の『因果経』に説くものの方が多くように思われる。今日私達の知っている「天上天下、唯我独尊」の方は玄奘三蔵の『大唐西域記』に、「菩薩生已、不_レ扶而行_ニ於四方_一、各七步而自言曰、天上天下唯我独尊」とあるのに依つたものである。「我れ一切の天人の中に於て、最尊最勝なり」と言うのも、「天上天下唯我独尊」と言うのもその意味する所は同じであつて、どちらでも良いと思う。今日「天上天下唯我独尊」の方を多く用いるようになったのは、恐らくその表現が簡潔であるのと、『西域記』が一般に広く流布し、愛読された為ではないかと思う。

言葉の流布については以上のような経緯によるものと思われるので、それで良いのであるが、ここで今一つ気になるのは「唯我独尊」

の理解の仕方についてである。この語については現在色々な解釈が為されているようであるが、その解釈例は別として、この語の意味を經典にそつて正しく理解するには、この語のあとに続く、「無量の生死、今に於て尽く。此の生に一切の天人を利益せん」とある語に注意する必要があるのではないかと思う。釈尊が生れながらにして「ただ我れ独り尊し」と言われたのは、何が故に尊いのかと言うと、自分が過去生に於て色々な修行をし、積んで来た功德がようやく完成し、無量の生死輪廻の境涯から全く抜け出た境涯に到達出来た存在としての自分だから、自分は尊いのだと言っているのである。生れてすぐさま七歩あゆまれたと言うのも、このことを示している。七歩とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道の境涯を一步一步踏みしめて、その境涯を飛び越えた第七歩目の一步、即ち悟りの境涯であると言われている。つまり、この語は、釈尊は生れながらにして既に悟りの

境涯にいたと言う立場に立つて説かれているのである。従って、この経説の中には、釈尊の過去生における長い間の数々の修行、即ち「本生物語」が前提されているのである。そのことを抜きにしてはこの言葉は理解し得ないのではないかと思う。

それはさておき、インドでこのような経説が出来て以来、仏教の流布と共に、お花まつの行事はインド、西域、中国、日本と、それぞれの国々の特色を持ちながら、広い範囲に渡って行なわれ、今日に到っている。今ここでそれらの一々について全て紹介するといまはないが、その中の主なものの一、二について述べてみたいと思う。

西暦四世紀末から五世紀初頭にかけてインドに旅行した中国の僧法顕の『高僧法顕伝』によると、インドの「摩竭提国」の所に、次のような事が記されている。

……凡そ諸中国唯々此の国の城邑のみを大となす。民人は富盛にして競ふて仁義を行へり。年々常建卯の月八日を以て行像す。四輪の車を作り、竹を縛して五層と作し、承轆堰轂有り、高さ二丈許りあり。其の状は塔の如く、白氈を以て上に纏ひ、然る後に彩画して諸天の形像を作し、金銀琉璃を以て其の上を莊校し、繒幡蓋を懸け、四辺に龕を作る。皆坐仏あり、菩薩立侍せり。二十車ある可し。車々の莊嚴は各々異れり。此の日に当って境内の道俗は皆集りて倡伎楽を作し、華香を供養す。婆羅門子来りて仏を請ず。仏は次第に城に入り、城内に入りて再宿す。夜を通して燈を然し、伎楽して供養す。国々皆爾り

とあり、西暦五世紀頃のインドにおける釈尊

の誕生を祝う「行像」のまつりの様子がしのばれる。

また、この少し前、中国の後趙王、石虎（三三四～三四九年在位）の頃にも釈尊の誕生を祝う祭りが行なわれている。故塚本善隆博士の紹介によると、陸翽撰の『業中記』に、石虎の命を受けた解飛という名工が造り出した精巧きわまる動く仏誕生場面の「だんじり」について次のように記している。

広さ丈余、長二丈、四輪の壇車の上に金仏像を安置し、上に九竜を作った。木製の僧が仏前に置かれ、また十余人の二尺余の僧が白袈裟をつけて仏像の周囲をかこんでいる。車を引き出すと九竜は水を吐いて仏像の上にそそぎ、像前の僧は手をもって仏の心腹の間を摩して誕生仏を洗い浄める形をする。十余人の僧は仏像をめぐるって行道する。仏前に来ると、仏を礼し手に香をと

って炉中に投ずる。車がとまるとこれらの運動も静止する。（塚本善隆著『中国仏教通史』第一巻、二七二ページ参照）

これらの記録によって、この行事が過去においてどのように行なわれて来たかと言うことの一端を知ることが出来る。

時代と、国と、民族と、その折々の状況によって形や行事の仕方は異なっても、同じ仏教を信仰するものにとっては釈尊の降誕を祝う心に変わりのあろうはずがない。

今日、ささやかでも、「お花まつり」の行事を通して、釈尊降誕の意義と、人々が互いに人間として生れ出でたことの意考を考え、子供達の心の中に小さくても大きく育つ仏の種子を授ければと念願する此の頃である。

心のはなし(下)

父の手のぬくもり

梶原重道

(社)全国保護司連盟副会長
堺市超善寺住職

ボランティアということばは、いつのまにか
ひろく使われるようになりました。

うれしいことにちがいありません。

昔——といっても、私らの若いころには、そん

なことを使う者は一人もいませんでした。しか
しだからといって、方面委員(現代の民生児童委員)
を中軸とした、いわゆる社会奉仕をする人びと
は、社会の蔭で黙々として奉仕をしたものであり

ます。

ボランティア活動ということばが、ひろがるにつれて、たしかに組織的に、またケースワーカーとしての勉強とともに、論理的に社会にとけこむようになりました。

明らかに大きな進歩でありましょう。

私は最近のある日、ボランティアビーユーローにたちよったとき、数名の婦人たちが話しあっている、おもしろいことが耳に入ったのであります。

みなボランティアとしての熱心な婦人ばかりでありました。

あの施設は、交通費もださないのです。

その点あそこは、ゆきとどいていて、茶菓の接待があり、そして交通費を月末に計算してくれますけど……。

聞くともなく耳に入った。こうしたことばは、何とも私には異様にひびいたのであります。

その経過も、実態もしらずに、こんなことを考える私は、まことに不遜なことであり、また勝手

な私見にちがいありません。

いわゆる社会福祉事業というものは、過去のように特定の人が行っていた慈善事業から、大きく脱皮し発展したこともよく承知してはいますが、しかしこのときの婦人たちの会話は、何となく異様というより、むしろ不快にひびいたのでした。

ひろく大きく輪をひろげて発展してきた、社会福祉の面が、何となくギスギスして、本来の福祉のころというものが、高くなり権利のつっぱりあいのような、変な方向につき進んできたような気になりますことは、やはりその根底には昔の慈善事業というものの先入観があるからでありましようか。

ともかくどこことなく、わりきれない気持がいたします。

奉仕ということばには、何ともいえない崇高な、そして人間としての暖かみがあります。

奉仕ということばは、私は大事な、そしてとて

も立派なことばだと思えます。

してあげる、ということより、させていなくという心の方がはるかに強い内容をもっているからであります。

してあげるとか、してさしあげるといふことは、奉という字の内容であるかもしれせん。仕という字になりますと、どうしてもお仕えるのですから、させていただくという内容が強くなければと考えています。

仏教には、布施というもののの中に、身施というものがあります。

文字通り、これは身を人のため、社会のために施すことであります。

わが身を施すのでありますから、極端には飢えた鳥獣に、わが膝もを切りとってその肉を与えたという、仏さまのお話もありますが、そこまでゆかなくとも、自分の立ち居ふるまいを人のため、社会のために行動するということがあります。

自分の行為行動が、ほんとうにその人のためによろこばれ、社会のために利することであれば、これがまさしく身施というものでありましよう。

このように考えますと、ことさらに身施といつてかたくなにならなくとも、わが一挙手一投足が、心のやさしさとか、暖かみかにかのあらわれであれば、悉くが身を施しているにちがひありません。

ボランティアーと、大きな声でグループ活動してくださるのも、結構にちがひありませんが、要はこの身施といった精神的からの出発であり、その活動であつてほしい気がいたします。

この身施ということ、私は最近しみじみとその心を感じさせられたことがあります。

それは小学校にあがつたばかりの新入一年生の男の子が、寒い雪空の冷たい朝、その父が会社に出勤するとき、毎朝手をひいてももらつて、その校門まで一緒に通いました。

校門の前で、その子は学校の教室に、そして父は校門をすぎて会社に通つたということです。

ところがその子が教室入って授業をうけながらも、左手をズボンの中にいれたままであったといひます。

その姿に気がついた担任の先生が、君はどうしてポケットに手をいれたままなのか、とただししました。

お父さんに手をひいてもらってきて、たいへん暖かったので、そのぬくもりがさめてしまわないように、ポケットにいれています、という返事をしたというのであります。

いろいろの考え方もあらうと思いますが、いま私の考えたいことは、お父さんがこの子の手をひいて冷たい朝を、会社の通勤時に一緒に通学したことが、この子の心にこれほどまでにしみこんだという事実を、おろそかにしてはならないと思うからであります。

仏さまの説かれた身施というものが、事だてて遠く大きいものではなく、父と子が通学するころなところにも、父と子の身施が立派に行われているということでもあります。

あるいは「あまったれ」とか、「過保護」とかの批判をあびることかもしれません。しかしこのように父の手のぬくもりを大事にできる子の心が問題ではないでしょうか。

この子が感じた父の手のぬくもりが、きわめて大切なことであり、このぬくもりを感じることでできる心が仏に通よう世界であることを、いまの親たちや、世の大人たちがじっくり考えてほしいと思うのであります。

われ舎衛の三億の家にや やどりけん しらず
地獄八熱のそこにや すみけん はづべし は
づべし かなしむべし かなしむべし

法然上人のおことばであります。

このおことばは、釈尊がご在世の御説法中にしその二十五年間滞在せられたのが舎衛国であり、仏法に縁深いその国でさえ、人口九億中に、三億は仏を拝し、三億は仏の出世を聞き、なお三億は

釈尊のみ名さえ知らぬものがいたと伝えられていました。

まして仏縁のうすい他の国では、そのことも知らぬままに、道理や順逆の転倒してしまった、いわば地獄生活を平然とつづけていたのであります。

法然上人のお嘆きなされたのは、仏教を学び、仏法がわかればわかるほど、しかもその仏縁の中にさりながら、地獄八熱の底にあえぐ人間苦を、自ら体得せられたからであります。

まさしく、現代社会の現実の様相は、阿鼻叫喚（あびきょうかん）地獄のように、その苦しみに絶えまなく泣き叫びをつづけている地獄かもしれません。

いきりたち、騒ぎたち、口いっぱいのことを臆面もなく、がなりたてているのではないのでしょうか。

親と子でさえ殺しあい、先生と生徒とでさえ殴りあっているさまは、まさに地獄の相であります。よう。道義がすたれ、モラルが低下したなどと、

他人ごとのように、恰好のよい方をしていますが、まさに地獄八熱の相にちがいありません。

だからこそ、法然上人の「はづべし、かなしむべし」のおさとしが、時代を憂え、社会を憂え、その中であえいでいる人びとを心から憂えられた、大きなお慈悲のあらわれでなくて何であります。

このような社会を、そしてその人びとを、心の底から、ほんとうに愛されたからこそ、法然上人は万人平等の救いの念仏をおすすめくださったのであります。

念仏を申すことによって、この世の地獄を極楽に、その苦しみから安らぎへの救いがえられるのであります。

念仏を申す、その信仰の家庭から、私はさきの、「お父さんの手のぬくもりが」感ぜられ、そしてそのぬくもりを冷やさないようになに大事に暖める心が、おのづからわいてくるのではないだろうかということ、考えてみたかったのであります。

△世相評談▽

天窗を開こう

○フレッシュマンの旅立ち

四月は陽春の季節である。学校では新入生を、各企業では新入社員を迎えて、フレッシュな気分のうちに新年度のスタートをきるこ



たから
宝 田 正 道
まさ
みち

とであらう。まさに春はうらら、長い冬の暗さから開放されて、花や虫たち同様、人間も戸外に飛び出し、明るい陽光の下で思う存分、歌い舞い踊り出したいに違いない。特に新人にとっては、環境のすべて、何も彼もが初体験の舞台として、彼の冒険心をかきたて

ることであらう。ボーイズ・ビー・アンビシン
ナスノ

ところで、未知の社会には、いろいろな魔物が住んでいる。金と女の誘惑はその最たるものの一つであらう。広い世間には、これを餌にして、いろんな形のアミを、いたるところに張りめぐらし、獲物のかかるのを待って生活の糧としている、毒グモのような人間も沢山いる。そして彼らの狙いやすいのは、世間知らずの新人である。学生にしてもビジネスマンにしても、新しく一人前になったつもりで有頂天になっていると、とかくあっさり彼らのアミにひっかかり、あたらしいのちを犠牲にしてしまう怖れもなしとしないのである。十二分の警戒と慎重な防備策を施しておかないと取返しつかないことは、言うまでもあるまい。

そこで、それらフレッシュマンを対象に、ちよっと耳打ちしておきたいのが、「天窓を開け」という一語である。

〇三つの窓

さて、その「天窓」とは何か？

安積得也という老先生がおられる。戦前には岡山県や栃木県の官選知事をつとめたこともあり、哲学者であるというより、詩人であり評論家であるといったほうが適切かもしれない。先生は五年前から、個人雑誌『未見の我』という季刊の雑誌を出して、人間には一人の例外もなしに未見の我という可能性をもっている、と信じ、人それぞれ自分の中にある自分の知らない自分を見出して見つめ、花を開かせるようにすることを主張されている。『未見の我』第二号に、「底窓・横窓・天窓」という題で、人間の心の働きについて論じられたが、「底窓とは、自分と自分の知らない自分―未見の我―との対話の窓」「横窓とは自分とすべての他者との対話の窓」そして、「天窓とは、自分と神仏すなわち大い

なるものとの対話の窓（宗教の窓）」と述べられている。つまり、底窓、横窓は人間関係を円滑にする思いあい分ちあいの心をさし、人間の無限にひろがる可能性を開発するための窓として天窓が必要である、というわけである。

私はこの説に心から賛成する。

○横窓と底窓

さて、この三つの窓のうち、新人たちがまず開くのは「横窓」であろう。「横窓」は、いわば社交の場であり、ふれあいブラザでもある。人は孤独では生きられない。その原理を痛切に体験するのは、人生の向うに、仲間たちの集団生活を営む社会を眺めた時である。そして自らがその中に加えてもらうためには、どうしても、彼らと対話する必要がある。じ、「横窓」を開かざるを得なくなる。つまり、学校や職場に入れば、人は自然に仲間が

ほしくなり、先輩、後輩あるいは上役、下役、ご同役の関係を通じて、「横窓」から吹きこむ風に洗脳される結果となるのが、一般の傾向であろう。

次に開くのは「底窓」である。これは、少し社会の空気に触れて、自分自身を見つめ直す必要が感じられるようになった頃、反省と野心のために開くことになるのである。

「坐」という字を見るがいい。「土」の上に「人」が二人いる形から成っている。この「人」は、自分ともう一人の自分、つまり自分の知らない未見の我とが並んでいる状態を意味する。そして「坐る」ということは、人がわが身の現在と、これから生きる将来の自分の可能性を想像しそれと対話しながら、大地の上で考える姿をさしているといえよう。

学校や会社にも馴れるとともに、新人も一人前になったつもりになる。そして失敗したり絶望したり自暴自棄になったりしながら過す毎日も多くなりがちである。そんな時、帰

宅の道でちょっと一杯、気晴しの酒を呑んだり、むしやくしやを鎮めるために思いもかけぬ乱暴な言行に及んだりして、他人に迷惑をかけることさえある。それが軽犯罪ですむ間はまだしも、事のはずみで放火や飲酒運転、婦女暴行、万引、さては殺人などの大罪にまでエスカレートする場合さえないとは言えないのである。

そんな時、酒などで一時の気休めをしても決して心のモヤモヤが消えるものではない。「底窓」を開いて、まず坐ることを勧めたい。自己反省の機をもつことである。そしてじっくりと己れの力量と行く末を考え、未見の我との対話を試みるのが一番効果的であろう。

○天窓とは？

しかし、横窓や底窓を、そこまで開いて社会に対処していいながら、最後に残った「天窓」を開こうとする人は意外に少ない。

特に若い人々は、神仏への信仰に無関心で、その必要を感じないですませる生活環境が多いからであろうか。

去る一月、総理府青少年対策本部が報告した第三回「世界青年意識調査」によって、日本人青年（十八歳から二十四歳まで）の人生観、特に宗教観を探ってみても、アメリカやフィリピン、ブラジル等が宗教重視度明確でかなり高いのに比べて、日本は尊重・非尊重派がほぼ相半ばし、否定も肯定もしない、きわめて不安定な心理状態であることが判明した。およそ宗教や信仰に対する確たる認識のないほど、いい加減な人生観はないが、残念ながら日本の青年たちは、その程度の生き方に満足しているのかもしれない。

この傾向を嘆いてかどうか知らないが、茨木県の某公立中学校で、昨年四月から十月までの間、毎週一回、登校時間を繰り下げ、自宅で五十分間、神仏への奉仕（掃除、供花、墓参など）などに当てるよう指導していた。学

校長は「人間の力を超えたものに対しての畏敬の念、祖先を敬う気持ちを養うといったもので、広義の宗教教育ならかまわない」という立場をとっているらしいが、外から見ると、一種の宗教的教育乃至活動であって憲法二〇条や教育基本法九条などに抵触しているという疑義も出て社会的な問題化しようとしている。

その成り行きがどうなったかはとにかくとして、このように「宗教指導」や「宗教まがいの活動」が、学校で行われると直ちに問題となる日本の現状であるから、宗教心のある青少年が育たないのも、無理ならぬことかもしれない。

○おわりに

かといって、いつまでも「無宗教」やそれに近い状態の人間ばかりがふえていったら、世の中は一体どうなるであろうか。獣性をむ

き出しにして、顔だけ人間面をして修羅道の血みどろな社会が現出するにちがいない。地球や人類を滅亡に追いやるのも須臾の間となるのは明白である。「核」にこりた日本人としては、特にこの際、「天窓」への関心を深くし、そこを開いて大いに神仏と対話する風潮をつくり出してゆくことが望まれる。

年をとると、大抵の人は死後のことに関心をもつようになり、罪悪感や無常感を起す機会にふれることも多くなる。自然、お寺参りをしたり墓を造ったり法話を聴いたりする気持もわいてくる。

しかし、それでは死出の旅路を飾るに過ぎない。気づくのが遅すぎる。仏教は、人間が若く元気で人生を歩む道すがら、必要な指針を与えてくれる教えなのであるから、もっと早くから活用しなければ一生の損である。棺桶に片足つまんでから信仰心をふるい起しても生きる足しにはなり難いからである。

今や、世界は「核」をめぐる恐怖で揺れて

いる。イ・イ戦争は一向に終結しないし、戦禍に泣き飢餓に仆れる難民の群はふえる一方である。ボタンを押せば地球は潰滅、人類絶滅の危機さえ叫ばれている。日本の某寺が地下納骨堂を核シエルターで包んで話題となったが、そんなことぐらいで生き残れると思ったら大間違いである。

二十一世紀を平和と共存で迎えたいと思うならば、まず日本の若者たちが、世界に率先して「天窓」を開くことであろう。未来を担う青少年たちが、軍備や兵器に頼らず、神仏との対話によって人間の無限にひろがる可能性を開発しようと志すならば、その暁にこそこの地上に浄仏国土成就衆生の理想境も建設されるに違いない。とにかく脚下照顧、一人一人が社会生活への「啓蟄」を契機として自らの「天窓」を開くことが最大の急務であることを自覚、実践するよう期待するものである。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6 変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6 判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願って、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一八三四七

名号書写運動を起こそう



(1) 教化のアイデア

私は、今年度の教化目標として、念仏信仰

よしだこうがく
吉田光覚

(岩手県教区教化団長
岩手県紫波町極楽寺住職)

の深化徹底—より深く、より広く—を掲げた。そして、具体案として①高声念仏の奨励②名号書写運動の推進③一千万遍念仏供養碑の建立を呼びかける方針である。

自分を語って恐縮だが、誰彼となく、私を評してアイデマンと言って下さる。私は、お世辞であろうと聞き流してはいるが、然し、お互いに布教効果を一層上げるためには、絶えず創意工夫を凝らすことが大事ではなからうか。

葬祭の法式だって、わが宗は随一との定評を屢々耳にする。真宗では、檀家の方自身が私の宗のお経はと謙遜されるが、各宗何れもそれなりの良さはある。曹洞宗の威儀作法は実に立派だ。回向文なども素晴らしい感動をうける。然し、如何に音律宜しく、嚴肅莊重な法儀も、度々、同じ型を目にしては感銘度の稀薄になるのは自明の理である。山海の珍味でも同じである。

この点を高橋良和先生は、仏教大学文献センター発行の『教化リサーチ』六号で、青少年教化の問題点と題して指摘しておられた。新鮮さと魅力に欠けると仰言っておられる。先生は、誌上では旧態依然の一般法要に論及

されたのではないが、青少年に理解されやすい儀式、作法の在り方の研究が不足なことへの警鐘と同時に、教団の体質は、そのことに対応出来る要素というか、姿勢が出来ていないことを論破しておられた。私もまったく同感である。知恩院の子供お手つき奉仕団で、子供に読ませている経典は、大人に読ませる漢文の在家用動行式である。私はこれに抗して昨年、「少年少女用のお経」を出版してみたのである。

布教も亦然り。聴衆の教養程度、男女の比、人数の多寡等によって夫々、内容や用語にも細心の配慮が必要だと思う。

よく弔詞の多い葬式などには、故人の逸歴を詳しく記した同じ内容のものを数人が読むのを苦々しく聞くことがある。これらを勘案して私は、アコ文は弔詞を予想した場合は、なるべく短く、難解な術語なり法語を用い、全然弔詞のない時は逸歴も多少恥めて文案するを常とする。どなたも心しておられると思

うが、特に関心を高めたい。

(2) 町内の供養碑

私の町は人口二万七千程の純農業地帯であるが、町内に供養碑（墓石は除く）が元禄五年を最古として大小六十種、三六〇基現存している。

最も多いのは庚申供養塔八〇基、馬頭観世音像六四基、南無阿弥陀仏名号碑四八基、念仏供養塔三三基、有縁無縁供養塔二六基、百万遍供養塔二〇基、和讃供養塔、山神等各八基、三界万霊塔四基である。なかでも、念仏信仰の碑が最も多く、一〇一基を占め、元祖大師と彫ったのが拙寺にだけ一基ある。この供養碑に私はヒントを戴いた。

(3) 遙拝の証

欧米ではかなり禪ブームが蔓延しつつある

と聞くが、日本では写経ブームが熾んになっていると聞く。然し、ポピラーな般若心経とか、浄土宗の発願文や一枚起請文の写経は、特定の方でなければ一般化は至難であると思う。わけても農村に於てはである。そこで私は遙拝の証と云うのを編み出した。数年前に『浄土宗新聞』に写真入りで紹介したことがある。

寺の行事案内の際に、都合で参詣できぬ家庭人は、わが家なり職場で菩提所を拝む即ち遙拝の証を欠席届と思って必ず提出するよう呼びかけたのである。

この欠席届の書式だが、何もむずかしいことはない。ナムアミダ仏と数多く書けばよい。別に毛筆でなくとも鉛筆でもボールペンでもよい。只それだけである。而も用紙などは綺麗な紙は不要。新聞織込みの裏面に印刷がなければ、それを用いること、過ぎたカレンダーを一枚破いて用いてもよい。いのちを考える廃物利用、屑龍行きの物を活用し、すべて

の生命を尊重する。——かくして、勿体なきの精確を培養する。一挙兩得——仏心仏行です。この習慣をつけようと努力して来たわけである。

この行は加速度とは言えぬが徐々に成功しつつある。最初二十人位だったのが、三十人から五十人へと、徐々に増して行く傾向がはっきり見える。ローマは一朝に成らず。まずは、積み上げることである。あせっても効果は上らない。不断の忍辱精進これあるのみである。

(4) 名号書写運動の展開

名号を書く為には唱えねばならない。心で唱え、頭で考え乍らナムアマミダ仏と記す。厭離穢土、欣求浄土の大佩を陣中に飾した徳川家康も、暇さえあれば名号を書写された。念仏信仰の深化に、これほど効果ある手段方法があるであろうか。小学校の一年生でも書け

る。それに、お念仏を唱えるのは浄土宗の檀信徒のみでない。日蓮宗系以外の方は殆んど念仏ではないか。当地では禅宗の檀信徒も、お逮夜には百万遍珠数繰りの作法を営んでいる。さすれば名号書写に参画して貰える。より深く、より広く！ 正に特効薬は名号書写の行である。

この運動展開の第一歩として、私は先ず自坊の檀信徒から着手した。次に配布したチラシを参考迄に記してみよう。

(5) お名号書写のすすめ

ナムアマミダ仏ナムアマミダ仏と数多く書きましょう。寸暇^{ひま}をみつけては、できるだけ毎日十行ずつでも書きましょう。心に唱えながら、お名号を書くことです。

ナムアマミダ仏と記していると、知らず知らずにあなたの心がおちついて参ります。曇天に、ポツカリ太陽が出たように、あなたの心

が明かるくなります。阿弥陀様のお慈悲で、生きる力が自然と湧いて参ります。種々の悩みを持つ方も、次第にうすれて、明日の希望が起ります。短気な方も柔和になり、理窟っぽい方は角がとれて参ります。

五分十分、つづけて記すためには、忍耐が必要です。年少少女は、この忍耐によって、真面目にお勉強ができるようになります。車を運転する青年も事故に注意しよう。一千辺書くまでとは、生活に一つのハリが生じ、一千辺書き了えたら二千辺と興味も生じます。これがみ仏のお蔭と云うことです。

このお名号が一千万集まったら一ヶ所に納めて一千万遍念仏供養塔を建立しましょう。みんなで結集すれば一億遍も可能だと思えます。

そうすれば、私共お互いが、生きた記念を永遠に残せることになります。ありがたいではありませんか。

どうか、老いも若きも家族ぐるみこの信仰

の善事に参加して下さい。心からおすすめ致します。

——極楽寺からのお便り——

右の次第で、どうか毎年、各教区に一基宛各ブロックでは一億遍念仏供養塔を実現すべく全宗門挙げての運動を希求して止みません。

記 名号書写のすすめのチラシと書写用紙は希望の方には実費で差上げます。

◎なお、くわしいお問い合せは、左記の住所の吉田光覚先生へ直接にお尋ね下さい。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

〒028-34 岩手県紫波郡紫波町弁沢48

極楽寺 吉田 光 覚 宛

TEL (〇一九六) 七三—六八八一

※「お名号書写」について広くご関心を持っていたくことをおすすめします。

＜『浄土』誌に連載された大長篇歴史小説＞

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに全五巻発売中！！

念佛ひじり三国志

— 法然もやぐる人々 —

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

第三十七回 毎日出版文化賞受賞

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替（東京）四一五六五三四

● 現代詩コーナー……

彼方からのいのち

坂^{さか}
田^た
文^{ぶん}
三^{ぞう}

若葉の季節

輝ける光 快い風

新しく鮮やかないのち

青く霞んだ山並の彼方

大空へ向けて
白く広がった海原の彼方
大空へ向けて

無限なる 無量なる

時空を越え

今ここに

新しく鮮やかないのち

若葉の季節

美しい花のひとひらに

潔よい蝶のひとまいに

彼方からのいのちをいたたく

浄土句集

一田牛畝選

京都 安川 彬光
石燈籠父祖幾代の雪耐えし

評 安川家は永く続いた立派な博多商人の

家柄で、福岡市正定寺の代々寺総代をされたが今は京都に移住されている。正定寺の本堂横の墓地が、五十米の道路となり、墓は除去されたが、安川家の墓の参道石燈籠は由緒があり、保存され、今年の大雪にも耐えているのである。

京都 岩井 伏水
支那海に今金色の冬日入る

評 作者は浄土宗で有名なる大布教師であ

る。布教先の、長崎県の野母崎での作句で、広々とした支那海のと水が一緒になった所に冬日が没して金色に輝いている、誠に雄大なる自然の相である。

熊本 山崎 石庭
初誦経御法語前編第一章

評 御法語は元祖法然上人の御言葉綴ったもので、毎日誦経するようになってい

る。元日の事なれば、第一章をおごそかに声を揃えてうやうやしく誦経し奉る。

福岡 上滝津弥音
合掌の悴み蓄となりけり

評 掌と掌と合すれば合掌となり、握りし

むれば拳骨となる。合掌は平和、拳骨は闘争の相となるのである。お互いに闘争を止めて平和の日暮しをしましょう。

三重 山田 歌甫
晨朝の木魚の音澄む寒の入り

評 朝の勤行で寒の入りの寒さに堪えて動

行をしている。身体中は寒いに違いないが、木魚を打って大声で念仏申して行くうちに、身も心も暖かくなって来て、法悦の涙に包まれることになるらん。

大分 丹羽 難中
珠数をくる声堂にみち寒念仏

評 広い本堂に百万遍の念仏の珠数を繰っ

ている。そして寒念仏が行われている。悴っている手も、声も段々大きくなり身も心も暖かくなって行くことならん。

福岡 原 敬二郎
屢煉と初診療の百寿翁

評 百寿を越えて猶達者な現役の医師とは

珍らしい。この寒い冬であったのに診療を続けられているとは尊いものである。

長野 友淵旋風子
人影の長き小路や春の月

三重 森 静枝
お身拭い来て男の子男坂

福岡 荒牧 亀齡
弓の如曲がりし竹や雪の音

福岡 荒牧 還愚
恙なく屠蘇くみかわす三世代

福島 青柳 良巖
下座奉仕法会の前の焚火かな

山形 松田 允子
雪しんしん山門の道今朝も掃く

福井 深井 鉅士
寒椿浮ぶ泉水御命日

福岡 行正一如子
大殿をゆるがす僧の初詣経

熊本 山崎 松子
雪やんで月の明るき夜となりぬ

群馬 島津 か寿
春の雪深々冠り村眠る

福岡 山崎 鬼川
あいそよくはめて過ぎ行く梅の門

山形 松田 光譽
経終へし御堂の障子しかと閉づ

長野 友淵知可人
雪吊りの伝統芸に目を見張る

福岡 前田 秀峰
寒念仏亡き死刑囚も御回向す

山口 三井 寛静
御詠歌の鈴鉦訝ゆる初稽古

山形 佐藤 緑石
雪雲の消えそうもなき過疎の村

福岡 安藤平次郎
雪晴の真直ぐなる道すぐに消ゆ

福岡 服部 光代
水洩のぼとりと落ちし句帳かな

東京 岩沢 義正
左右動かし障子張り終へぬ

福岡 积河野ねはん
参道の雪かきをして母達者

山梨 青山富貴江
木蓮の冬芽ふくらみ節変る

東京 吉田ゆきゑ
小春日や庫裡上棟を待つばかり

本山の非番や春眠ほしいまま 一田 牛畝

論語「仁」論（上）

—「仁」は共同社会の理念—

河野 喜雄
こうの よしお

（文芸評論家）

はじめに

私は、五十余年来、芭蕉・その美学—を専攻して来た者である。

一昨年、その第六著、「さび・わび・しをり—その

語原と美学的語義—を上梓（ベリカン社刊・全国学校図書館協議会撰定）し、その最終書である「芭蕉美学の体系」をも、略々稿了しているので、数年前から、学生時代からの坐右の書であった、「万葉集」と、「論語」との、再検討を始めた。

私は、その両書共、諸先生方の解説書は、大抵所持

し、数読しているのであるが、その再検討を始めて、巻初からジックリと熟読・探究してみても、何よりも驚いたことは、その先生方の御説が、勿論・最少限度に教示せられる所は存したのであったが、必ずしも全面的に納得・信頼したいという一事であった。

先づ、「万葉集」であるが、その解説者は、概ね、いわゆる「国文学者」である。

ところが、その先生方の実質は、「国語学者」であつて、真に「文学」を解する方はまことに少なく、また「文学的」ではあつても、それに徹底している方は、極めて少ない。

「文学」というものは、言うまでもなく、語学的基盤に立脚するものではあるが、その「語学的次元」を止揚・超越しなければ、「文学」に昇華し得ないのである。

ところが先生方は、個々の語句の解明のみに終始して居られるので、その解説には、失尖せざるを得ないようなものさえも、決して稀れではないのである。

殊に「詩歌」というものは、「歌う」ものなのであるから、其処には必ずや、その「歌い易い」ところ

の、「歌調」というものが存する。

そしてその「詩歌」ことに万葉の短歌などは、その歌われた直後に、聴き手にその歌意が理解・納得出来るものでなければならぬ。

それを個々の語句解釈の中に存在しつつ、「持つて廻った」解釈をされて居るので、トンチンカンなものになって了うのである。

「万葉集」には、ただ一例だけを、挙げておこう。巻第二・一三七に、左の一首が存る。

柿本朝臣人麿、從三石見国一別妻上来時歌二
首并短歌（その短歌一首）

秋山爾 落黄葉 須叟者 勿教乱曾 妹之当将
見

秋山に 落つる黄葉 もみぢば しましくは
な散り乱りそ 妹が当り見む（私訓）

右の第四句、「勿教乱曾」の「乱」字を、佐々木信綱・沢鴻久孝・岩波版「古典大系」本・新潮版「古典集成」本・小学館版「古典文学全集」本は、皆、「ま

がふ」と訓解しているのであるが、これはハッキリと、滑稽としか言い様がない。

落葉が散り乱れるので、そのために妻のいるあたりが見えなくなつて了う（見まがふ）ので、落葉よ、どうかしばらくの間、散り乱れないでくれ、というのが、疑いもなく、一首の歌意であり、その「散り乱れる」のと、「見まがふ」のとは、明らかに前後・因果関係である。

その前因的な「乱」字を、後果的に「まがふ」などと訓むのは、如何なるセンスであらうか。

少なくとも、文学的センスではなからう。

「万葉集」解釈への批判は、これだけで止めておこう。

問題は、「論語」においても、略々同様である——と私は信ずる。

私は「論語」の解説書は、二十余冊所持しているが、その解説先生方の、中国語及び中国史の解説には、傾聴すべきものが多いのであるが、「論語」にハッキリと感得し得るところの、孔子哲学・就中そのメインテーマであるところの「仁」の解説において、頗

る曖昧であつて、信用し難いのであり、それは、決して「論語」の真の解釈・解説ではないのである。

以下、私は、そのメインテーマであるところの「仁」について、私見を述べたいと思う。

一、「仁」は共同社会の理念

この「仁」字は、孔子当代（前五五二—四七九）においては、王・任・安・从などの字と併用されていたのであったが、孔子はその自家哲学においてこれを「仁」字に統一したのであつて、それはこの仁字が、同意字の「从」字に明らかのように、「二人」を意味し、その「二人」に孔子におけるその哲学的叡知によつて、「共同社会」の最少限度の「象徴」を看取し、人が二人居つて、一諸にその生涯を暮さなければならぬとしたならば、その各人はそもそも如何に対処・當為すべきであるか、を慎重・深甚に考慮・思案の末、この「仁」字に「共同社会の理念」を措定し、仔細にその當為を解説したのである。

その、「仁」が「共同社会の理念」であることを先

づ確説しているのが、左の孔語である。

志^レ於^二道^一、然^レ於^二德^一、依^レ於^二仁^一、游^レ於^二芸^一。

(述而第七・六)

その「道」とは、言うまでもなく、共同社会に生きる一人としての、「人たるの道」則「人道」であり、その「徳」とは、その個々人の生来及び後得の人力・実力であって、いわゆる Personal power であり、「芸」とは、その「遊ぶ」とせられているのに明らかのように、その「志於道」のための、具体的手段なのである。

そして、「徳」と「芸」とをその様に解するとき、「依於仁」の「仁」が、その行路目標であり、則「理念」であることは、万、疑いない。

私たちは、共同社会に生きる人間としての「道」を意図したならば、その自身の全力を揮い、「仁」を目標とし、芸をその具体的手段として、歩一歩、踏みしめて行くべきである。

というのが、本語の主旨であらう。

「仁」が、「共同社会の理念」であることは、本孔語に依って、先づ一応は明らかである、と言えよう。ではその「仁」とは、如何なる当為を意味するのであらうか。

二、「問仁」に対する孔子の答語

弟子たちの「問仁」に対して、孔子は、左の四語（他語省略）を答えている。

対顔回。

克^レ己復^レ礼^レ為^レ仁。一日克^レ己復^レ礼、天下歸^レ仁焉。
為^レ仁由^レ己而、由^レ人乎哉。（下略）。

(顔淵第二・一)

対仲弓。

出^レ門如^レ見^ニ大賓^一、使^レ民如^レ承^ニ大祭^一。己所^レ不欲、勿^レ施^ニ於^二人^一。（下略）。（同 前・二）

対司馬手。

仁者其言也詘。(中略)。為之難。言之得無詘乎。

(同 前・三)

對樊遲。

愛人。

(同 前・二二)

先づ、對顔回の孔答であるが、その「克己」とは、言うまでもなく、個々人が、その自我を極力抑制して、「二人」の相手方に対して、出来るだけ迷惑を掛けないことを意味し、其処に必然的に必要不可欠なものこそは、その「二人」の、「相互調和の形式」であるところの「礼」なのであって、「復礼」とは、すなわち居常、その「礼」に帰一するように心掛けよ、というのである。

そして、その「一日」とは、「毎日・一日中」の意であって、単なる「一日」だけの「克己復礼」に依つて、「天下帰仁」などということが、勿論・有り得よう筈がない。

そして此処で大事なことは、「為仁由己而、由人乎哉」の結語であって、前章の孔語にハッキリと示されているように、「然於德」なのであるから、「仁」が、

共同社会における、個々人の当為であることは、疑いなく、孔子は、本語において、「由人乎哉」と、それを極度に力説しているのである。

そして、この「問仁」者の顔回子淵であるが、彼は孔子の子供位の若年であつたにも拘わらず、孔門中とはもとより、当代中国において、孔子が最も依信・親愛していたところの知己・心友であり、その自説の承継・布行者であること確認していた人物であつた。

その顔回を評価するところの孔語は、「論語」中にも実に十有数語を存するのであるが、それを如実に立証するのは、左の一語であらう。

子、謂顔淵曰、「用之則行、舍之則藏。唯、我、与、爾、有、是、夫。」
(述而第七・一〇)

ところがその顔回は、孔子の病歿直前に、夭折してつた。

顔淵死。子曰、「噫、天喪予。天喪予。」

(先進第二一・九)

顔淵死。子、哭之慟。從者曰、「子、慟矣」。子曰、「有レ慟乎。非ニ夫人之為慟ニ而、誰為慟」。

(先進第二一・二〇)

孔子が、如何に顔回到依信していたか、以て察すべきであらう。

故にこそ孔子は、その「問仁」に対して、「克己復礼」という端言・切句を以て、之に教示しているのであり、顔回は更にその「目」(具体的當為)を問うて後。

回、雖レ不レ敏、請事斯語ニ矣。

(顔淵第二二・二)

と答えているのである。

次に仲弓に対する孔答であるが、これは言うまでもなく、「克己」の具体當為を明示するものであつて、一度その自家を出でて、共同社会裡に入つたならば、非常に大切なお客様に対すると同様に、可及的慰勸・鄭重に応待・言動せよ、というのであり、殊に政

府の高官として、人民を使役するのケースにおいてさえも、大祭において、神仏に奉仕するが如く、謹慎・深重に対処せよ、というのであつて、本孔語が、その「克己」の、至高の當為を例示するものであることは、万・疑いないであらう。

人間というものは、例えば「克己」ということは、一応心得ていながらも、時所によって、屢々自我的に、その範疇を逸脱して了うものである。

故にこそ、孔子は、その極度・最高限度の當為を教示しているのであるが、更にそれを補足しつつ、「己所不欲・勿施於人」と言い添えているのであつて、孔子は、この全く同じ言葉を、子貢からの、

有レ一言而可ニ以終身行之ニ者ナリ乎。

(衛靈公第一五・二四)

という問いに対して答えているのである。

本孔語は、実に如実に、可解的に、その「克己」を教示しているではないか。

第三に、司馬手に対する孔答であるが、この「仁者其言也詘」という一言は、「克己」の具体的當為を、更に切示するものであって、その「詘」字は、「言」字に「又」字が当てられているように、恰かも自分の胸に刃先を当てられて、「弁舌ると刺すぞ」と、極度にその發言を抑制せられたケースを示しており、本字に對する適切な和訓は存しないようであるが、私はこれを、上掲のように、「つつしむ」と訓みたい、と思う。

そして孔子は、この不言実行・先行後言・言行一致——をイデーするところの語を、「論語」中において、左の様に數語を、実に端言・切句に依って、教示しているのである。

(前略)。君子、(中略)。敏_ニ於事_ニ而慎_ニ於言_ニ、就_ニ有道_ニ正焉_ニ。(下略)。

(學而第一・一四)
(君子)先行而、其言(而)後從之。

(為政第二・一三)
(前略)。言寡_レ尤、行寡_レ悔、禄在_ニ其中_ニ矣。

(同 前・一八)
古者、言_ニ之不_レ出_ニ、恥_ニ躬之不_レ逮_ニ也。

(里仁第四・二二)
君子、欲_ニ下_ニ納_ニ於言_ニ而、敏_ニ於行_ニ上。

(同 前・二四)
(前略)。故君子、名_ニ之必可_レ言_ニ也。君子於_ニ其言_ニ、無_ニ所_ニ苟_ニ而已_ニ矣。

(子路第一・三三)
其言_ニ之不_レ作_ニ、則其為也難_ニ。

(憲問第一四・二二)
君子、恥_ニ其言_ニ之過_ニ其行_ニ也。

(同 前・二九)
言_ニ忠信、行_ニ篤敬、雖_ニ蠻貊_ニ之邦_ニ、行_ニ矣。言_ニ不_ニ忠信_ニ、行_ニ不_ニ篤敬_ニ、雖_ニ州里_ニ、行_ニ乎_ニ哉。

(衛靈公第一五・六)

上掲の數語が、不言実行・先行後言・言行一致の、孔子の確信を示していることは、万・疑いないであらう。

そして、その「言行一致」こそは、人言一体なのであって、その「人言一体」を如実に表示する一字こ

そ、他ならぬ「信」なのであり、孔子はこの「信」字の、「人言一体」を衷心・悟得して、この一語をもつて、「仁」における「克己」の理念として、「忠信主一」と言っているのであるが、その「信」に就ては、茲に及ぶまい。

ただ茲では非・一言触れておきたいことは、「為政第二・一四」の孔語の訓みであつて、諸先生方は殆んど総て、これを「先づその言を行ないて、後に之に従がう」と訓んで居られるのであるが、原字が、「先行其言而」とあるので、一応そのように訓むほかはないことはよく判るが、私はその「而」字は、「先行而」とあつたものを、伝写の際誤写したものが、そのまま伝えられたものと信ずる。

「先ず行ないて、その言は後に従がう」であるならば、「其言也設」の孔語とピッタリであるが、「その言を行ないて」であるならば「先言後行」であつて、それも「言行一致」として、一応は納得し得るものの、「而うして後に（之に）従がう」というのは、一体何に従がうのであろうか。その「言ったこと」を、その通りに行なつたとしたならば、もはや何も「従が

う」ことなどはないではないか。

この訓みは、滑稽としか言ひ様がない。

最後に、対樊遲の孔答であるが、その「愛人」を、諸書大方、これを「人を愛す（るなり）」と訓んでいるのであるが、私はこれを命令形に、「人を愛せよ」と訓むべきものと信ずる。

その「人」とは、勿論、「二人」の相手方なのであつて、その相手方を「愛し」さえしたならば、「己祈不欲、勿施於人」より以上に、「仁」を具体的に実現し得るであらうからである。

以上、弟子たちの「問仁」に対する孔子の訓答によつて、「仁」の具体的当為が、「克己復礼」であることは、略々明らかになった。

そして、その「克己」の二次的理念が、「信」であることは上述しておいたが、「信」に就ては別途したく、茲では次章に移りたい。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』四月号をここにお届けいたします。

どうか今後ともまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、新登場の小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきますいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm×30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm×50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八八二二八七

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 二、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十巻 四月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年三月二十五日 印刷
昭和五十九年四月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
千二〇三 振替東京八―八二―一八七番

(新)

(刊)

『生活の倫理』

著者 大正大学教授
宮 林 昭 彦

B 6 判 一九四頁 定価二二〇〇円 (〒二五〇円)

◎春の章・夏の章・秋の章・冬の章・法の章——五章よりなる宗教的エッセイ。季節感に富んだやさしい滋味深い文章が印象的かつ感動的!!

◎『浄土』誌の愛読者諸兄にも必ずや感銘をもって、読後の穏やかな人生観照となることであらう。広くおすすめしたい。

(発売) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

大 道 社

電話 (〇三) 二六二―五九四四

振替 (東京) 一―八二四七

第五十巻

四月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年三月二十五日印刷 昭和五十九年四月一日発行